彼女と僕

なず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女と僕

【Ｎコード】
Ｎ５１０３Ｚ

【作者名】
なず

【あらすじ】
彼女と僕は〝研究者〟。
来るべき日が、ついにきた。

「ツェリの言葉」のＡ　の昔話。

（前書き）

「ツェリの言葉」のＡの昔の話です。
昔の話なので、ツェリは出てきません。
Ａと”彼女”しか出てきません。

考えに考えて煮詰まってできた話です。
出来は若干気に入ってます。

では、よろしくお願いします。

「　、私はキミほど人間性に欠けた人間を見たことがないよ。なにかが足りない」
淡々とレポート用紙に文字や数式を書き込みながら、彼女は言った。
「でも人間だよ、僕は」
突然どうしたのと尋ねれば、彼女は手をとめて溜め息をつく。疲れが溜まっているせいか、重い溜め息。
「私はね、　。死にたくないんだよ」
まるで子供に言い聞かせるような口調。そのくらいのことは分かっている。
「そうみたいだね」
「キミは違うんでしょ」
ムッとしながら返すと即答されてしまい、あえなく撃沈。
その通り。
僕は永遠の命なんて、欲しくないんだ。

▽

”研究者”と呼ばれる人種の僕たち。頭脳を駆使し、なにかを発明することに秀でている人種。
その数は少なく、今では世界でたったの二十人だけ。しかもその八割が老人。
その上僕らには”頭を使うほど死に近づく”という、呪いのような病がある。
一度に普通の人間の倍以上の速さと内容の濃密さを持つ僕らの脳は、それでも他の人間の脳と同じ大きさの容量しかない。
同じ大きさのコップに倍の速さで水を入れれば、すぐに溢れてし

まう。僕らの脳は他の人間よりも働けるが、その分すぐにガタが来てしまうのだ。
それでも何かを造ることをやめない僕らだから、きっと半世紀後には滅んでいるだろう。

そんな風に考えて、”研究者”たちは足掻きはじめた。寿命を計算しながら、ほぼ全員の知識をあわせて不死を開発しはじめたのだ。

そう、ほぼ全員。
僕は入らなかった。

▽

「ロボットでも造ろうか、なんて軽く考えるものではないなあ」
書きかけの設計図を前に、大きく伸びをひとつ。三日三晩で徹夜は、流石にきつい。
「……そうだ、外に行こう」
今日は雨だけど、まあ気分転換にはなるだろう。使い古した緑の傘を手に、僕は湿気た外に出た。
すると。
「あ」
「あ、　」
家の近くで、彼女と遭遇。彼女が外に出ているなんて、珍しい。
しかしそれよりも珍しいのは。
「白衣、どうしたんだい」
”研究者”の象徴ともいえる白衣。”研究者”であることを誇りに思っている彼女は、いつでもそれを着ていたのに。
彼女は僕の質問に、なぜか悲しそうな、情けないような、とにかくいつでも強気な彼女には似合わない顔をしてから喫茶店を指差した。

「中で話すよ」

▽

残り時間が少ないらしい。

彼女はホットコーヒーをかき混ぜながら言った。ミルクの白がきれいな渦を巻く。

僕はどう相槌を打とうか迷った末に、そっか、と呟いた。

「あと十年もてばいい方みたい」

「悪い方は？」

「三年」

「そっか」

それきり黙りこんでしまった彼女を前に、僕はトーストを齧った。

僕がサクサクと咀嚼する音と、彼女がとっくにミルクが混ざったコーヒーをかき回す、カチャカチャという音だけが僕らの間を通る。

店内には僕たちと、奥に行ってしまった店員だけしかいないので、とても静かだ。

「続けるよ、研究」

蚊の鳴くような小さな声に顔をあげる。

いまにも泣きそうな顔で、彼女は繰り返した。

「続ける」

「……そっか。止めないよ、僕は」

死にたくないから、命をかけて研究をする。

それは彼女のアイデンティティーだということを、僕は知っている。アイデンティティー。存在意義。

彼女が研究するというのを止めれば、彼女は”いい方”であと十年生きられるだろう。

けれどそれは同時に彼女の存在否定にもなる。
だから僕は止めなかった。
のに。

「……っ」

それは彼女が息をのむ声だったのか、僕が驚いた声だったのか。
理解する前に、頬に衝撃がはしる。
ぱあん、と乾いた音と痛みが思考を静止させた。
「――んで、なんで、止めてくれないの！」
「　　……？」
どうして怒っているんだろう。どうして泣いているんだろう。
真っ白になった頭で考えてみても、僕には、なにも分からない。
倒れたティーカップも気にせず、彼女はテーブルに拳を叩きつけて――喚いた。

「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！　けど研究はしたいの、でも生きたいの！
どうすればいいのか分からないのに、悩んでるのに、なんでキミはそんな……っ、なんで、どうしてそんなに冷静なの！？　なんでキミは、そっけないの！？
私が、私が、死んでも、キミはなんとも思わないの！？」

半狂乱。
常に冷静沈着だった彼女からは想像もつかないような取り乱し方。
そんな彼女を前に、僕は右頬をおさえて呆然とするのみだった。
彼女はもう何も言わず、肩で息をしながらぼたぼたと涙を流していた。
沈黙が続く。
一分か、十分か、もしかすると一時間は経っていたかもしれない。

それほど長く感じられる沈黙は、やはり彼女に破られた。
「……帰る」
「……うん」
ああ、僕は間違えたんだ。でも謝ってはいけないのだろう。
それだけは分かった。

▽

帰宅すると、僕は足早に自分の机に向かった。
机の表面を覆っている、文字が書き込んであったり、図がメモされている大きな白い紙を掻き分けて、引き出しを片っ端から開けていく。まるで泥棒みたいに黙々と、淡々と、漁るように探していく。
漁る、漁る、漁る――あった。
あって、しまった。
見つけた途端に外に飛び出す。呆けている暇はない、彼女はまだ近くにいるはずだ。
丸めて握り締めた紙の束。
これは僕の研究結果のひとつで、そしてこの行動は僕が彼女の選択のために行うと、他ならぬ僕が決めたことなんだから。
「だから――泣くな」
それはどちらに言った言葉なのか、わからないまま僕は走った。
もうなにが正しい選択かなんて、それこそ神しか知らないだろう。

▽

しばらくは息切れで彼女に話しかけることができなかったが、息

を整えている間、彼女は目を丸くしながらも待っていてくれた。たまには運動しなければ。
「どうしたの、キミ、帰ったはずじゃ……」
「　　、だって、こんなところに、いるじゃ、ないか」
「私は、その」
研究所（こんなところ）。彼女はやはりそこにいた。　彼女の心安らぐ場所はきっとここだろうと思ったが、正解だったようだ。
戸惑う彼女に、丸めて持っていた紙の束をおしつけるように渡す。
「これ」
「……なにこれ、レポート？」
僕は答えずに、ただ彼女をみつめる。
レポートを捲る彼女の顔が、驚愕に染まってゆく。

「これ……不死、の」

僕は頷いて、そのまま足元に視線をやって答えた。
「かなり前に、少しだけ研究したんだ」
「これ……私たちの中でもなかった理論よ！　これをもっと突き詰めたら、もしかしたら……！」
興奮したようすで火照った顔をあげた彼女は、僕をみて固まる。
生暖かい涙を頬に感じていた。けれどそれを拭う気はなかった。
受け取ってほしい、けれど受け取ってほしくないという矛盾。その気持ちからくる涙。
これは僕の、言葉のひとつだ。

「僕は不死になりたくない。薬品と数字でできた命が、僕らが本来もっている命と同じだとは、どうしても思えないんだ。そして
、きみには開発された、まがい物の命を授かってほしくない。――だけど」

僕は耐えるから。僕が耐えるから。
どうか、きみはきみの道を。
「きみがそれでも生きたいと願うから、
僕が――きみに、生きてほしいから」
受け取って、僕を許して。
僕のやっかいなワガママを――許して、走ってくれ。
「死にそうになっても、生に向かって走って」
おねがい。
いきて、エナリア。

▽

”研究者”たちが本格的に不死の研究に乗り出したことは、その一週間後に報道された。
一面に踊る文字と、モノクロの写真のなかの彼女――エナリアを一瞬だけみて、僕は新聞を折りたたむ。
「ばいばい」
さようなら、もう遠くなってしまったきみ。
目をつむると、不意に彼女の声が聞こえた気がした。

いきるよ。
ありがとう、だいすきだよ。
ばいばい、アス。

（後書き）

「すきな人の寿命を知ったらどうするか」
そう考えながら書いたお話です。そんな状況になったことがないので、こうするかなぁと想定してたら泣きそうになりました。あれ。

彼らの”すき”が、恋人同士のそれだったのか、友人としてのそれだったのかは、読んでくれた皆さんの想像におまかせします。

では、最後まで読んでくださってありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5103z/

彼女と僕

2011年12月17日10時51分発行